



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	大学史資料室展示報告「学藝今昔」(fulltext)
Author(s)	藤井,健志
Citation	東京学芸大学大学史資料室報, 5: 27-29
Issue Date	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/159351
Publisher	東京学芸大学大学史資料室
Rights	

大学史資料室展示報告「學藝今昔」

人文科学講座 教授（大学史資料室副室長） 藤井健志

はじめに

2017年度の展示は、2017年11月14日～22日に「學藝今昔」というタイトルで、本学内の芸術館で行った。この日にちの設定は、11月18日に行われた東京学芸大学主催の国際シンポジウム¹に合わせたものである。同シンポジウムには、韓国、台湾からも研究者が来て発表をするため、そうした海外の研究者にも、展示を見てもらいたいと思ったのである。また本学の芸術館は使われる頻度が高いため、私たちとしては、もう少し長期の展示を希望していたのだが、この期間に限定せざるを得なかった。

今年度のもう一つの事情として、私たちが予算措置されていた文部科学省の特別経費（文化的・学術的資料との保存等）²の最終年度だったということがある。この経費によって、私たちは師範学校に関するデータベースを作成しており³、その過程で師範学校に関する知見を増やしていた。それについては、昨年度の展示において「學藝アルバム—師範学校の歴史をふり返る—」と題して資料を公開したが、本年度は経費の最終年ということもあり、師範学校から東京学芸大学の今日までの100年以上にわたる歴史を通観できるものにしたいと考えたのである。こうした考えがあったため、展示のタイトルを「學藝今昔」とした。

国際シンポジウムの際に、本学の出口利定学長は、次のような挨拶をしている。

師範学校を母体に創設された東京学芸大学にとりまして、近代日本の師範教育史を研究し、あわせて戦前・戦中の自校史を振り返ることは、今後の教育を考えるうえできわめて重要なことです⁴。

今回の展示もこうした考えを共有しており、師範学校から現代にいたるまでの資料を、時代順に並べたのである。短い期間ではあったが、来場者は200人近くあり、韓国、台湾の研究者も興味をもって展示を見学してくれた。

1. 師範学校時代の展示

師範学校時代の展示に関しては、昨年展示を母体にして、そこに2014年に行った師範学校の修学旅行に関する展示を組み合わせた。師範学校時代に教育に関しては、いろいろな批判があることは、私たちも承知しているが、実際に当時の資料を見ると、それなりに自由闊達な生徒たちの姿を見ることができる。このことは昨年の展示報告にも書いたが⁵、修学旅行の記録にもそのことはよく現れている⁶。来場者のアンケート結果を見てみると、回答者のほぼ半数が、師範学校の修学旅行に興味を持ったことがわかる⁷。修学旅行の具体的な資料の方が、師範学校の沿革よりも印象深かったという意味の記述も、アンケートの中にはあり、展示の意義を示唆している。

もう一つ今回の展示で評価が高かったのは、映像資料であった。1936年に当時の青山師範学校で制作された映像が、本学の附属図書館を整理している間に見つかったのである。これは「創立六十周年記念映画 思ひ出の青山」と題されたもので、全部で13分余りのものである⁸。この年に青山師範学校は、青山から世田谷区下馬に移転しており⁹、移転直前の状況¹⁰を撮影したものである。当時の学校の様子や、寮生活の様子、附属小学校における活動などが映されているとともに、「昭和十年度卒業式」がやや長く取り上げられている。「君ヶ代斉唱」「勅語奉読」「証書授与」などの他に、学校長による告辞の文章が映像にも映されている。無声のものだが、画面にはいくつかキャプションが入っており、大体その内容を追うことができる。師範学校時代

のこうした映像資料きわめて珍しいものだと思う。展示の中でも評価の高かったものであるが、今後も本
大学史資料室の重要な資料の一つとして位置づけられるだろう。

2. 東京学芸大学時代の展示

この時代の展示も、以前の展示をまとめなおしたものを中心とした。私たちは一昨年より、東京学芸大学の
初代学長の本下一雄氏の資料の整理を行っているが、その過程で一九四九年の開学記念式典の貴重な写真を入
手している。今年度の展示のチラシにも使用したが、当時の門の左側に東京第一師範学校¹¹、右側に東京学芸
大学の門標がそれぞれ掲げられている写真である¹²。今年度の展示では、この時の東京第一師範学校の門標を
展示した。この門標も本学附属図書館に長い間保管されていたものである。こうした実物は、今後も永く保管
していくべきものである¹³。

戦後の学芸大学は、東京第二師範学校（旧豊島師範学校）が小金井に移転されたのをきっかけに小金井に
キャンパスを設置することになった。戦後の歴史においては、小金井の戦前と戦後に関する展示も行った。こ
の展示は2015年に行った展示資料を利用したのだが、学芸大学の敷地が、かつては農地であり、さらにそ
れが陸軍の研究所になる様子をいくつかの写真と地図で示した。東京学芸大学の歴史は、小金井の戦前・戦後
史とも重なるのである。

戦後の学生生活に関する写真も展示したが、特に男女の学生が一緒に授業を受けている様子を写した写真も
あった。これは戦前の師範学校時代にはありえなかったことである。こうした何気ない一枚にも、実は戦後の
教育の特徴が表れているのである。

おわりに

最初にも述べたように今回は芸術館の展示室を使用した。昨年は図書館のラーニングコモンズを使用した
が、実は場所については見学者はやや不満だったようである。ラーニングコモンズはそもそも展示をするよ
うにはできておらず、また展示期間中もそこでは学生が学習をしたり、議論をしたりしていて、落ち着いて展示
を見る雰囲気ではなかった。今回のアンケートでも、芸術館は見やすかったという評価もいただいている。本
学には展示に適したスペースがないために、今後もどこで展示をしていくかは考えなければならない。

こうした場所の問題とともに、附属学校や職業科に関する展示も見たかったという記述がアンケートの中
には見られ、今後どのように各部分の展示を考えていくかも課題である。さらに展示に関する宣伝が必ずしも十
全でなかったことも反省材料である。私たちは私たちの大学の歴史を、責任をもって示していく必要があると
思う。今後も資料収集と保管に勤めながら、展示をさらに発展させていきたいと考えている。

1 「師範学校アーカイブズの現状と課題—20世紀東アジアの教育と向き合う—」というテーマで行われた。

2 この経費は、特別経費（後に機能強化経費）共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）という枠組によるもので、私たちは2015年から2017
年の3年間、「旧師範学校関係資料の保存とアーカイブズシステムの構築」という事業名で、予算措置を受けていた。この経費の最終年度には師範学校に関す

る国際シンポジウムが予定されており、本文中に言及したシンポジウムはこれにあたる。

3 このデータベースは、東京学芸大学大学史資料室のサイト (<http://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/>) において公開している。

4 上記シンポジウムのチラシに掲載された学長の「ご挨拶」より引用。

5 『東京学芸大学大学史資料室報』4 (2017) 53 ページ。

6 『東京学芸大学大学史資料室報』2 (2015) 22 ページ参照。

7 アンケートには来場者のうち 61 人の人が回答してくださり、そのうち 33 人の人が修学旅行について「特に興味をひいたもの」と答えている。ただし複数回答を可としているので、「一番興味をひいたもの」というわけでは必ずしもないが、回答中では一番多い数字であった。

8 実はこの映像のシナリオは以前から保存されていた。各ページには、内務省の検閲印が押されている。

9 ここは現在、東京学芸大学附属高校となっている。附属高校は今日でも、当時の青山師範学校の校舎の一部をそのまま使用している。

10 ちなみにこの年の 2 月に、いわゆる 2.26 事件が起こっている。映像の主要部分はその直後に撮影されていて、画面にはこの時の雪が写っている。

11 東京府の師範学校であった青山師範学校は、1943 年に官立に移行し、東京第一師範学校と改称された。

12 この時の開学式典は、現在の附属高校で行われている。当時はここに大学本部が置かれていたのである。各キャンパスに分かれていた大学が、小金井に統合されたのは、1964 年のことである。

13 残念ながら、東京学芸大学の初代の門標は現在行方不明になっているため、展示できなかった。私たちも少し不思議に思っているのだが、以前の門標はあまり保管されていない。鈴木明哲「東京学芸大学の門標の変遷」『東京学芸大学大学史資料室報』1 (2014) 11 から 12 ページ参照。